

【暗証聖句】

「イスラエルは、エジプトの国、ゴシェンの地域に住み、そこに土地を得て、子を産み、大いに数を増した」創世記 47 章 27 節」

【日・ヤコブ、ヨセフのもとへ行く】

創世記 46:3、4 節「神は言われた。「わたしは神、あなたの父の神である。エジプトへ下ることを恐れてはならない。わたしはあなたをそこで大いなる国民にする。わたしがあなたと共にエジプトへ下り、わたしがあなたを必ず連れ戻す。ヨセフがあなたのまぶたを閉じてくれるであろう。」

神は、エジプト行きを恐れるな、とヤコブに言われました。エジプトを恐れる必要のない理由を主は三つ上げています。①「わたしはあなたをそこで大いなる国民にする」②「わたしがあなたと共にエジプトへ下り」③「わたしがあなたを必ず連れ戻す」からだと言われました。すべての約束において、主なる神が「わたしが～をする」と言われています。ヤコブがするのではないのです。主がすべてのことをしてくださる。だから、恐れてはならない。安心して良いのです。

ところで、「わたしがあなたを必ず連れ戻す」と主は言われましたが、生きているときにヤコブはカナンの地に戻ることはできませんでした。創世記 50 章 13 節に「ヤコブの息子たちは、父のなきがらをカナンの土地に運び、マクペラの畑の洞穴に葬った」とあるように、死んだ後に、その亡骸がカナンに戻されたのです。しかし、神は、天の故郷にヤコブを連れ戻して下さったのです。同じように、信仰者の人生も、どこに行ったとしても主が共に伴ってくださり、最後は天のカナンに必ずつれ戻して下さいます。また、「ヨセフがあなたのまぶたを閉じてくれるであろう」とありますが、これは「死に水を取る」ということではなく、ヤコブに与えられた使命を、ヨセフが引き継ぎ完成してくれる、という意味です。

創世記 46:27「エジプトへ行ったヤコブの家の者は合わせて七十人であった」と人数が記録されています。完全数である 70 という数字は、完全性を表しており、すべてのイスラエルがエジプトに行ったことを表しています。

【月・ヤコブ、エジプトに定住する】

創世記 47:2 「そのときヨセフは、兄弟の中から五人を選んで、ファラオの前に連れて行った。」

ヨセフは、兄弟の中から五人を選んで、ファラオの前に連れて行きます。五という数字は、エジプトでは縁起の良い数字と言われていています。ファラオは、彼らが希望しているゴシェンの地に住むことを許可し、そこで彼らの先祖代々の仕事である羊飼いの仕事に従事するようと言います。「もし、一族の中に有能な者がいるなら、わたしの家畜の監督をさせるがよい」との言葉までもらいます。これもヨセフが信頼されていたおかげです。ちなみに、ゴシェンはエジプトの東にあり、カナンに近い場所でした。

創世記 47:7 「それから、ヨセフは父ヤコブを連れて来て、ファラオの前に立たせた。ヤコブはファラオに祝福の言葉を述べた」

ヨセフは 5 人の兄弟をファラオの前に連れて行ったあと、今度は父ヤコブをファラオのもとに連れていきます。すると、ヤコブはファラオの前に立ち、「祝福の言葉を述べ」ます。「前に立たせた」という動詞は、通常祭司に用いられる言葉です。異国の身分の低い老人が、エジプトの王を祝福する者となったのです。霊的には、ファラオよりも高い地位にヤコブは立ったということです。

【火・ヤコブ、ヨセフの子らを祝福する】

ヤコブが病気だとの知らせを受けて、ヨセフは二人の息子マナセとエフライムを連れて行きます。ヤコブはヨセフにこう言います。

創世記 48:5 「今、わたしがエジプトのお前のところに来る前に、エジプトの国で生まれたお前の二人の息子をわたしの子供にしたい。エフライムとマナセは、ルベンやシメオンと同じように、わたしの子となる」

ヨセフの 2 人の子、マナセとエフライムを祖父ヤコブの子にするとは、ヨセフに 2 つの部族の権利を与えることを意味します。それは、ヨセフが他の兄弟たちの 2 倍の祝福を受けることです。ここから、マナセ族とエフライム族が始まり、イスラエルでユダ族に次いで中心的な部族となっていきます。そのあと、ヤコブは多くの孫たちの中で、マナセとエフライムだけを祝福し、預言的言葉を語ります。

創世記 48:13、14「ヨセフは二人の息子のうち、エフライムを自分の右手でイスラエルの左手に向かわせ、マナセを自分の左手でイスラエルの右手に向かわせ、二人を近寄せた。イスラエルは右手を伸ばして、弟であるエフライムの頭の上に置き、左手をマナセの頭の上に置いた。つまり、マナセが長男であるのに、彼は両手を交差して置いたのである」

ヨセフは長男のマナセを父の右手に、弟エフライムを左手に向かわせました。ところが、イスラエルは手を交差して弟エフライムの頭に右手を、兄マナセの頭に左手を置きました。ヨセフがこれを見て間違っていると思い、ヤコブの右手をマナセの頭の上に移そうとしましたが、ヤコブは「いや、分かっている。わたしの子よ、わたしには分かっている。この子も一つの民となり、大きくなるであろう。しかし、弟の方が彼よりも大きくなり、その子孫は国々に満ちるものとなる」と言ったのです。聖書では右手が祝福のシンボルですから、弟が兄よりも祝福される（大きな働きをする）ことになるのです。これはヤコブ自身も兄エサウに対して、またヨセフ自身も他の 10 人の兄たちに対して、同じ経験をしたのです。

#### 【水・ヤコブ、息子たちを祝福する】

創世記 49:1、2「ヤコブは息子たちを呼び寄せて言った。「集まりなさい。わたしは後の日にお前たちに起こることを語っておきたい。ヤコブの息子たちよ、集まって耳を傾けよ。お前たちの父イスラエルに耳を傾けよ。」

ヤコブは自分の死期が近いことを悟り、子どもたち全員を呼び寄せて語ります。しかし、「後の日に起こることを語っておきたい」と言っているのも、遺言というよりも、神様から託された言葉、預言を語ろうとしていることがわかります。神様から託された言葉を持って子どもに伝えることができる親は幸いです。一人ひとりにヤコブは語っていますが、それが部族の未来を預言となっていたり、過去の罪を思い起こさせる厳しい言葉となっていたりしました。その中でも印象的なのは、ユダに対する言葉です。

創世記 49:8～10「ユダよ、あなたは兄弟たちにたたえられる。あなたの手は敵の首を押さえ父の子たちはあなたを伏し拝む…王笏（おうしゃく）はユダから離れず、統治の杖は足の間から離れない。ついにシロが来て、諸国の民は彼に従う。」

この後のイスラエルの歴史は、ユダ族中心に進みます。ユダ族の相続地にエルサレムがあり、ダビデや王たちはユダ族から輩出されます。なによりも、主イエスが、ユダ族から来るとの預言が語られます。「シロ」とは、メシア預言を表す言葉で、「ついにシロが来て」とは、救い主到来の時を指します。ユダ族はイスラエルのリーダーを超え、全世界の民が待つ、救い主を世に送る部族となるという壮大な預言となっています。

#### 【木・約束の地の希望】

創世記の結びの言葉として希望に満ちた出来事が書かれています。第一に約束の地に戻ると言う希望です。父ヤコブの亡骸を、兄弟たち一緒に、マクペラの畑の洞穴に葬ったわけですが、これは後の出エジプトの先駆けとなるのです。第二に、神様が悪を善に変えられる希望です。ヤコブの死後、ヨセフに復讐されるのではないかと兄たちは心配しました。しかし、ヨセフは「「恐れることはありません。わたしが神に代わることができましようか。あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」（創世記 50:19、20）と答えて安心させたのです。第三に、人類救済の希望です。ヨセフは自分の死が近づいたとき、「私は間もなく死にます。しかし神は必ずあなたがたを顧みてくださいます、この地からアブラハム、イサク、ヤコブに誓われた土地に導き上げてくださいます…その時には、私の骨をここから携えて上げてください。」（創世記 50章 24節）と言います。これは単に自分が死んだら、父ヤコブのように骨をカナンの地に埋めてほしいということだけでなく、この時から 300 年も先の「出エジプト」についての預言となっています。そのとき、「私の骨をここから携えて上げてください」と、ヨセフは言っています。これは霊的に、人類救済のとき、永遠の御国に帰る日が来るとの希望となっているのです。